

この人に聞く

もりかわ内科クリニック 院長

府中市出身。私立修道高校、鳥取大学医学部を卒業。日本消化器内視鏡専門医・指導医。趣味は「年に一度は妻と行きたい」というスキューバダイビング。ゴルフ、テニスもこなす。最近の休日は「もっばら、5歳の息子の自転車遊びに付き合っていて過ごしている」と父親の顔ものぞかせる。39歳。

森川民也さん

もりかわ・たみや



胃腸・消化器・内視鏡内科
もりかわ内科クリニック
福山市東手城町1-3-11
東手城ヘルスケアモール内
TEL 084-983-0088

鳥取大学医学部を卒業後、岡山大学医学部第一内科に入局。当時の指導医が内視鏡技術に長けた医師だった。「入局して間もないころ、重症の胆管結石の患者さんが運ばれて来た。体全体の衰弱が激しく、多臓器不全の一步手前という厳しい状態。しかし、胆管に詰まった石を内視鏡で取り出す手術を行った結果、患者さんの体に負担をかけずに救命できた。この時、患者さんの役に立つ内視鏡をもっと勉強したいと強く思った」

平成14年から一年間は、千葉県の亀田総合病院で内視鏡検査の研究を目的に勤務。「国内で、さきがけとされる先生がいた。年間一万人以上の検査を五、六人体制で

で受け付け。一般的なスケジュールとして、検査直前の夕食は普通に食べ、21時以降は水分のみに制限する。効き目の穏やかな下剤を服用して就寝。当日は来院後、個室で大腸洗浄用下剤を約二時間かけて服用、腸を洗浄してから検査する。個人差もあるが、9時に来院すれば昼前後には検査が終わるという。

大腸専用のカメラは直径一ミリ。一番細いタイプのカメラを使っている。「ある程度の太さがないと、奥まで到達できないが、二歳児にも使用できる細さなので、患者さんの不快感はないはず」

行っており、一日に一〇人以上の検査をすることもあった」。研修後は、岡山大学病院、岡山済生会総合病院、尾道市立市民病院、福山医療センターなどで働いた。

早朝内視鏡検査も

胃の検査と言うと、バリウムの飲みにくさを連想する人も多いのでは。近年は味も飲みやすく工夫されているが、レントゲン撮影時は体位を何度も変えるため「疲れる」という声も聞く。

同院の胃カメラは、口か鼻の両方から選択できる。いずれも細いカメラで、口からのカメラは直径九一〇ミ、鼻からのタイプは直径五ミの細径カメラと呼ばれるも



居住性の高い個室も完備した

のを用いる。どちらとも局所麻酔を使用。口からのタイプには鎮静剤も併用するので、痛みは感じない。「検査方式は患者さんの希望を優先して決める。口からカメラを入れると、舌の付け根の上を通るので喉頭反射という多少の吐き気を催すことも。鼻の場合は、舌の付け根を避けて、直接のどから食道へ向かうので不快感はより少ないようだ。鼻の構造には個人差もあるが、鼻からの方が楽という人が多い」。火・木・土の週に三回は、8時から「早朝内視鏡検査」も実施している。

胃がんのリスクはピロリ菌感染が大きな鍵を握るといえる。「ピロリ菌があると胃の粘膜が萎縮し、胃がん発症の確率が上がってしまう。胃カメラが苦手な人は血液検査でピロリ菌の感染の有無と胃粘膜の萎縮の状態を調べておけば、胃カメラ検査が毎年必要か否かの判断の参考になる」。比較的最近に分かったことなので保険適用外だが、お勧めの検査と言う。

「父親が病弱で、医者と縁の切れない生活だった。小学生のころ、『将来は医者になってほしい』という父の思いを肌で感じ、自然と医者を志していた。幼い時に抱いた父への思いが「患者さんに負担をかけず、命を救いたい」という使命感につながっている。